

の主張は、しばしば目にする。これは語源論や伝統仮名遣いの問題となるので、術語の「読み」に仮名綴りを用いたら、はてしない議論となったに違いない。だからGHQの「助言」によってローマ字綴りを採用したことは、こういう面倒を避ける絶好の「天の声」だったと言うべきだろう。また当時優勢だった国語ローマ字化論者の主張に、巧みに便乗したとも言える。

なお用語集では常用漢字以外の文字の使用は、分野ごとに国語審議会の了解の下に認め

られているが、これだと分野にまたがる記述の場合には、使い分けの結果不統一になる。また、当初想定していなかったコンピュータによる文字列検索では、期待した結果を得られない。したがって一分野に認めた例外使用文字は、他分野にも自動的に及ぼすべきである。

(184-0013 小金井市前原町 5-8-7  
5-8-7, Maehara-machi, Koganei-shi,  
Tokyo 184-0013, JAPAN)

## 新刊

□上野雄規：宮城県維管束植物目録。89 pp. 2008. 自費出版。

2001年に発行された「宮城県植物目録2000」に、発行以後に宮城県で発見された維管束植物を丹念に補充した目録である。これはTUSにある標本に基づいているので、その記録は再確認しやすいものとなっている。新たに追加された主なものにシダ植物ではオオバノハチジョウシダ、キノクニベニシダなど、種子植物にサクラバハシノキ、ホザキヤドリギ、ヒメタデ、チョウセンゴミシ、ヒキノカサなどがあり、合計167種が含まれている。

本書によれば、宮城県の維管束植物はシダ植物23科182種29雑種、種子植物159科2203種54雑種が記録されているという。学名、和名の他に「宮城県植物目録2000」と上野雄規(編)「北本州産高等植物チェックリスト」(1991)のページ、北限、南限などの分布記号、および「環境省レッドリスト改訂版2007」, 「宮城県版レッドリスト2001」の評価記号が対照できる。

購入希望者は著者 (tbs-ueno@feel.ocn.ne.jp) に申し込めば送料込みで1部1,300円とのこと。(大橋広好)

□Heywood V. H., Brummitt R. K., Culham C. and Seberg O.: **Flowering Plants Families of the World**. 568 pp. 2006. [Royal Botanic Garden, Kew. 2007. 424 pp.] £27.95. ISBN 13: 978-1-84246-165-5.

1978年に発行されたV. H. Heywood (ed.), *Flowering Plants of the World*の改訂版が2007年に出版された。“Families”という語が加えられていて表題が変わっているが改訂版である。発行以来2年近く過ぎてしまったが、今回の改訂版も紹介しておきたい。旧版は「大澤雅彦(監訳):ヘイウッド花の大百科事典」として2005年に邦訳されている。

本書は科のレベルで世界の被子植物全部についてコンパクトに概説していることが最大の特徴である。旧版の上梓以来被子植物の分類は特に分子系統解析の成果を受けて大幅に変化した。この改訂版では旧版の306科から507科に増加している。これらの科は単純に双子葉類と単子葉類とに分けられているだけで、双子葉単子葉それぞれに中で科名のアルファベット順に並べられている。高次ランクの分類はAPG IIを改訂したSoltis et al. (2005)に基づいて便宜的に目ランクを含めて作られた一覧表に並べられているだけとなっている。これは現在の被子植物に関する知識の状態が安定した分類体系を作り上げるには不十分であるためと考える理由による。多くの科で代表的な一つまたは複数の種の図があるが、この図は旧版の図を再配列している。